



## コロナ禍におけるクラブの運営について

発表者：岐阜北ロータリークラブ  
会長 前田吉彦

皆様、こんにちは。

GTM の貴重なお時間を頂きましてありがとうございます。

岐阜北ロータリークラブの本年度会長の前田吉彦でございます。

当クラブはコロナの広がりによって前年度3か月の例会休止を余儀なくされました。今年度はなんとか7月から例会を再開することが出来てほっとしております。例会場においては都ホテル岐阜長良川様のご協力を得て従前の2倍の広さの会場になりました。例会中はソーシャルディスタンス、消毒、マスクの着用等の対応を採ってウイルス感染拡大の防止を徹底しております。また、クラブの奉仕事業等については、継続事業である小学生向けのバレーボール大会、福祉施設である若松学園への支援、献血等についてそれぞれの関係機関のご意見を優先し、感染対策を万全に行った上で奉仕活動を予定しておりますが、どうしても縮小しての継続となる予定です。さらに、今後の状況や地域行政の方針に従い中止もあり得るとの認識をしております。コロナの感染拡大による人の健康や命を脅かすような事の無い様に慎重な判断をする用意も出来ております。

現在も第2波のコロナの猛威によって社会に大きな打撃を受けており、今までの普通や常識が通じなくなっています。

その渦中で社会全体が国を始めとして様々な支援を求めており、各種団体が支援や援助をしています。

ロータリーは奉仕の実践です。今何をロータリアンとしてすべきなのかを考えていました。そのような中で、ロータリーが創設されたのはスペイン風邪の流行前と気づきました。となれば、先人のロータリアンはスペイン風邪の時にどんな行動を取ったのか興味があり、インターネットで検索してみました。「スペイン風邪」「ロータリー」で検索すると、MYROTARY の記事もヒットします。当時、ロータリー世界本部があったシカゴでは、新規感染者数が一日で 1,200 人以上増加した時期もあったそうです。ロータリアンが市民活動の最前線で行動し、政府や人びとに全力で奉仕したこと、職業奉仕をしたこと、多額の寄付をしたことなどが掲載されています。是非皆様も検索されることをお勧めします。ポールハリスの言葉にも「ロータリーが私たちにとって何を意味するにせよ、世界は、その活動成果によってロータリーを知るのです。」とあります。今こそ100年に一度の災害の中で、ロータリアンとして様々な行動しなければならない時期ではないかと考えます。本年度のテーマでもある機会の扉を開けていくことを決意を表明してご挨拶と代えさせていただきます。